

## ベケット研究会第 52 回例会 発表要旨

2018 年 12 月 15 日 (土)

東京工業大学

戸丸優作 「怠惰な話者の流涎症：『名付けえぬもの』の言葉とイメージの間で」

**Idle Speaker's Sialorrhea: Between Language and Images in *The Unnamable***

(近日更新予定)

ベケットのモダニスト教養小説—『並には勝る女たちの夢』再考

**Beckett's Modernist Bildungsroman: Reconsidering *Dream of Fair to Middling Women***

杉本文四郎

21 世紀になってからベケットの小説を教養小説の伝統から読み解く試みが相次いでなされている (Sheehan, Bixby, Mooney, Stewart)。1932 年頃執筆され 1992 年に出版されたベケットの長編小説『並には勝る女たちの夢』(以下、『夢』) は、こうした教養小説との関連において 2 つの主要な問題を提起している。ベケットが初めて執筆したこの小説についてはブルースト『失われた時を求めて』とジョイス『若い芸術家の肖像』の影響が指摘されているが (Pilling)、これらの先行作品は教養小説のサブジャンルとされる芸術家小説の伝統に連なっている。『夢』においてベケットは芸術家の自己形成を描くそうした伝統を屈折した形で受け継ぎながら、コスモポリタンのでありかつメディアを越境するような独自の芸術的発展を予示している。第 2 に、「我々は父、母、そしてゲーテを讃える」と語り手の言う『夢』では、ゲーテによる最初の教養小説『ヴィルヘルムマイスターの修業時代／遍歴時代』への僅かな言及がこれまで考えられてきた以上に重要なのではないか。ゲーテとの間テクスト性をいくつか検討することで、ゲーテ的な「教養 (*Bildung*)」の理想に対する強烈なアイロニーが見出される。そのアイロニーを通して、ベケットの芸術家としての自己形成についてより理解を深めることができるだろう。